

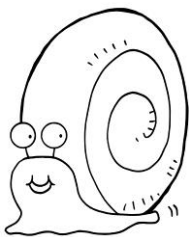


そろそろ梅雨入り。皆さんは雨の日は好きですか？
「濡れちゃう」「外で遊べない」なんて声が聞こえてきそうです。でも雨の日だって悪いことばかりではありません。この時期、街中でよく見かける「紫陽花」はとても雨と相性が良く、たくさんの水分を含んで、雨の日はより生き生きとした姿を見せてくれるんですよ。これから色づき始める美しい紫陽花を、普段通る道沿いで探してみませんか。そして「-」を「+」に…そんな発想の転換のヒントを本は沢山私たちに与えてくれます。ぜひ図書館にも足を運んでくださいね。お待ちしております。



のんびりと 読書楽しむ 梅雨の時期

思い切って、読書に没頭してみてもいかがですか？
お気に入りの1冊が見つかったら、教えてくださいね。



6月生まれです！



アンネ・フランク

1929 - 1945

ドイツに生まれたユダヤ人の少女。ナチス・ドイツから逃れるため、オランダの隠れ家で約2年間過ごしました。そこでの生活を書き記した「アンネの日記」はとても有名ですね。

アンネ・フランクは15歳という若さで強制収容所で亡くなりました。極限状態の中でも、多くの前向きな言葉を残しているアンネの姿に、とても強さを感じます。

(1929年6月12日生まれ)

今月のおすすめ本



『雨ふる本屋』

日向 理恵子:作 913 ヒ

妹に対してやきもちをやいていたルウ子。ある日おつかいの帰り道、雨が急に強くなり、ルウ子は市立図書館にかけこみます。そこで出会った1匹の生き物に導かれ、たどり着いた「雨ふる本屋」。そこでの経験が、ルウ子の気持ちに大きな変化をもたらします。自分の気持ちを振り返ることができる1冊です。シリーズもありますよ。

『雨上がりのメデジン』

アルフレッド・ゴメス＝セルダ:作 963 ゴ

舞台は南アメリカ大陸にあるコロンビアのメデジンという町。学校に通わず、親友アンドレスと過ごす10歳のカミーロ。貧しさと暴力の中で、毎日をどう生きるかを考えています。ある日訪れた図書館での出会いをきっかけに、カミーロの人生に変化が…恵まれた環境ではないけれど、強くたくましく生きているカミーロの姿に力がもらえます。

『すごすぎる 天気の本鑑』

荒木 健太郎:著 451 ア

・「雲が動物に見える現象」にはちゃんと名前がある
・妖怪のしわざ？「虹色をまとう影」の本当の姿
・じつはけっこう出会える!? 絵画のような「天使の梯子」
などなど…78の項目をとてもしっかりと説明してくれています。この本を読んだら、身近にある空が、また違って見えるようになるかもしれませんね。